

間・温度依存性、飽和性かつ可逆性であった。標識リガンドは迅速に internalization され種々の PLC 作働薬及び AC 作働薬によりこの internalization は抑制された。種々の NK1 受容体作働薬の相対的ペプシノーゲン分泌能はその受容体に対する相対的親和性と良く相関した。

7. 胃 reactive lymphoreticular hyperplasia (RLH) として2年間経過観察された胃 MAL Toma (low-grade malignant B-cell lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue) の1例

石塚伸子, 三村正裕, 田口忠男
岩間章介, 石原運雄, 加藤繁夫
(千葉労災)
塚本 剛, 鈴木 秀 (同・外科)
今野暁男 (同・病理)
武内利直, 三方淳男
(千大・一病)

症例は、83歳女性。1991年1月、体重減少のため当院受診。内視鏡検査で胃悪性リンパ腫を疑ったが、病理診断は、RLH (reactivelymphoreticular hyperplasia)。1993年3月、内視鏡検査で病変は増悪し、病理診断も MAL Toma (low-grade malignant B-cell lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue) であったため、胃切除術施行。近年、免疫組織学的手法により従来 RLH とされた症例のほとんどが、MAL Toma であることが明らかになってきている。

8. Diaminodiphenyl sulfone (DDS) が奏効した副腎皮質ステロイド剤不応性特発性血小板減少症紫斑病 (ITP) の1例

真村瑞子, 平澤 晃, 西川哲男
(横浜労災)

症例は43歳女性。副腎皮質ステロイド、アザチオプリンの投与が無効で、血小板数は3万/ μ l以下を推移し、出血傾向をみとめていたが、DPS 75mg/日の投与により血小板数は有意に増加した。DDS による副作用はみとめていない。DDS の ITP を含む血小板減少症に対する有効性の機序は網内系への作用により血小板貪食が抑制されるためといわれている。DDS の投与は難治性の ITP に試みる価値のある治療と思われる。

9. 顆粒リンパ球の減少に伴い貧血の改善が得られた赤芽球癆の1症例

葛西正明, 小野田昌弘, 関矢信康
時永耕太郎, 斉藤康栄, 佐藤重明
(鹿島労災)
鏡味 勝 (東邦大・佐倉)
横田 朗, 中村博敏 (千大)

本症例は、顆粒リンパ球の減少に伴い貧血の改善が得られており、CD3⁺4⁻8⁺16⁺の顆粒リンパ球がモノクロナールな増殖を起こし、直接あるいは骨髄ストローマ細胞を介して骨髄赤芽球系を抑制していたと考えられる。

日常の診療で、リンパ球増多症に続発した赤芽球癆を念頭に置き、末梢血液像を検査すべきである。

10. 当科における一年間の診療状況

五十嵐忠彦, 脇田 久, 伊藤国明
藤井博文, 大津智子, 佐々木康綱
阿部 薫
(国立がんセンター東・化学療法科)

1992年7月より1993年9月まで、進行固型癌142例、悪性リンパ腫及び造血器腫瘍107例を経験した。同期間、21ヶの臨床試験 (phase I ~ III) が進行し実施された。進行乳癌、肺癌、大腸癌において62%から76%の高い登録率が得られた。急性白血病の新鮮症例では71%であったが悪性リンパ腫、骨髄腫においては42%から50%に留まった。再発症例、除外症例に対する有用な salvage protocol が今後は必要であろう。

11. 高齢で発症した CSF 産生腫瘍の1例

北 靖彦, 篠浦 拓, 遠藤伸行
太枝 徹 (千大)

91歳女性。発熱のため93年6月2日入院。骨盤内に9cm大の腫瘤があり、腺癌による癌性腹膜炎を認めた。経過中白血球数は急増し4日には12万に達し、治療の甲斐なく15日に死亡した。未剖検だが血漿、腹水中の G-CSF および、血漿中の GM-CSF 高値より原発不明の CSF 産生腫瘍と思われた。CSF 産生腫瘍は本邦で約100例の報告があるが、本例は最高齢と思われた。原発は子宮、卵巣、大腸が考えられたが、これらは過去の報告では稀と思われた。